

\* 海外文献紹介 \*

Movement: "Enchantment"  
in the Life of a Child

Peggy Emerson & Cindy Leigh

*Childhood Education*

Nov./Dec. 1979

今までの運動教育のプログラムは、「身体発達」との関連ばかり目を向けて立てられ、その心理学的・情緒的側面との関連は顧慮されずにきました。しかし、子供たちが身体運動やダンスによって自分の感情を表現し、自分の精神生活の必要性を満たしていることには多くの人が気づいています。哲学者、Susanne Langerは芸術の哲学論文の中で、人間は様々な芸術形体で自分の感情を象徴的に作り直す「象徴化する動物」であると表現しています

が、ダンスもまた感情を象徴的に表わす一形体であるといえます。

ミシシッピ大学共同研究者 Emerson と Leigh は、その象徴性に目を向け、身体運動とダンスは子供たちを日常から非日常の世界へとつれていってくれる「魔法の国への空とぶじゅうたん」であるといい、「空想と想像力」を究めていくような身体運動とダンスのプログラムを教師が立てることを提案しています。ここに二人が子供たちの成長に合わせて立てた四段階のプログラムを紹介してみましょう。

一、表現としての身体運動

先生は、子供たちが、身体的・知的能力への探検と挑戦を安全に行なえるような様々なタイプの空間を用意することが必要である。

たとえば、乗り越えていけるもの、下をはいくぐっていけるもの、柔かい空間、堅い空間、狭い空間、広い空間などである。

二、展開としての身体運動

子供がある程度自分の身体をコントロールできるようになると、先生は子供が「正確に自己」の概念を得られるように助けて

やらなければならぬ。たときば、「ほら、Carol がじゃうたんのう上をはっていったわよ」「Jan は高い棚に手が届いているわ」「Maya は床の上でつぶれてしまったわ」「今は誰も動いていません。みんなとても静かです」というように。

### 三、想像としての身体運動

これは、子供たちが簡単な問題解決ができるようになり、「自分が誰であるか」ということだけでなく、何になることができるか想像できるようになったときに始められる。先生は無限の可能性を想像によって作り出す。

「できるだけ高くまで手を伸ばさない」「椅子の下をいろんなやり方でくぐってみましょう」「ぬいぐるみの人形はどんなふうに動くかしら?」「糖みつの中を歩いているふりをしましょう。」

### 四、創造としての身体運動

子供は成長するにつれ、自分はひとりであるわけではなく、必ずしも自分がしたいようにいつでも空間が使えるわけではないという現実がわかってくる。ここでの先生の役割は、新しく「想像的」状況を提案したり、新しい可能性をとりいれたりすることである。たとえば、音楽や視覚的効果を使うことが考えられる。

また、Bruno Bettelheim はその著『The Uses of Enchantment (邦訳「昔話の魔力」評論社)』の中で、「昔話は子供たちが直面している内的葛藤問題について、自分自身で解決を見い出せるような示唆を与えてくれる」と述べているが、ある子供たちには、耳から聞いた昔話の「概念」を踊ってみて始めて理解し、感じるこゝとができるかもしれない。「ひとたび木になってみれば木のことはずっとよくわかるようになる」といわれているように。

以上のようにプログラムを見えますと、著者が子供の精神発達と身体発達の相互的かね合いからプログラムを立て、小学校では音楽、国語、体育と分けられる領域も実は相補的に働いてこそ教育効果を高めることを暗にほめかしているように思えます。

著者は最後に、「教師として我々は、すべての子供たちに、この生き生きした表現形体を受けさせなければ、ある者たちは『沈黙』の生に運命づけられてしまうかもしれない」とダンス教育の必要性を強調しています。

(高野 藤子)